

2018.5

春夏

No.106

思文閣出版

鴨東通信



◆ 日常語のなかの歴史 18

いち【市】

◆ 長澤伸樹

◆ てーたいむ

近代数寄空間を

煎茶文化でよみとけば

◆ 尼崎博正 ◆ 麓和善

◆ 矢ヶ崎善太郎 ◆ 武藤夕佳里

ユネスコ無形文化遺産に登録された

「和食」を知るために

◆ 江原絢子

茶の湯空間からの近代

◆ 桐浴邦夫

ある地方大学の

国際シンポジウムの舞台裏

◆ 藤原貞朗

デザインの二五〇年

◆ 岡達也

春の吹雪に北米大陸開拓を思う

◆ ウエルズ恵子

◆ 史料探訪 67

英「蝶筆」大原女図

◆ 八反裕太郎

市井の人に寄り添う画趣

朝日カルチャーセンター・
京都教室

思文閣出版 コラボ企画

思文閣 文化サロン

教養・趣味など多彩な講座を展開する朝日カルチャーセンター・京都教室とタッグを組み、思文閣出版選りすぐりの著者による講座を、月一回開催します。毎回、編集者イチオシのテーマをご用意してご参加をお待ちしています。

第9回



5月26日(土)13時～ @朝日カルチャーセンター京都教室
講師：ウエルズ恵子(立命館大学教授)

「アメリカは歌う——働く人々の歌」

20世紀アメリカの歌は世界の大衆音楽に大きな影響を与えました。アメリカの歌はなぜパワフルになれたのか？ ロックやブルースやゴスペルソングやフォークソングのルーツはどんな歌だったのか？

異なる文化背景の移民たちは働きながら歌い、今のアメリカを作り出した重労働に苦しみつつ、差別や緊張に耐えて歌は育ち、洗練され、商業化されていきました。

この講座では、貧しかった時代のアメリカの歌を映像や音源でたどり、歌はどう生き続けるのかを考えます。

《関連図書》『ヴァナキユラー文化と現代社会』定価：本体六、〇〇〇円(税別)

第10回



6月30日(土)10時30分～ @朝日カルチャーセンター京都教室
講師：王 静(大阪観光大学観光学部講師)

「中国茶芸」が生まれるまで」

最近日本でも人気が出てきた中国茶芸はいつ頃始まったのでしょうか。

現在の中国が建国した頃、茶葉は一般の人が手に入れることは困難でした。その後茶葉の生産量が急激に回復し、逆に大量に「余る」という事態が生じてきます。そこで茶葉の消費を促進すべく国を挙げて考えだされたのが茶文化という新しい発想でした。茶芸も茶文化の一つとして考案され洗練されてきたのです。

この講座では、中国の茶文化誕生の背景、台湾茶芸からの影響、真の中国文化としての茶芸の発展など、中国茶文化や茶芸の歴史を、実際にお茶をいいただきながら分かりやすく紹介します。

《関連図書》『現代中国茶文化考』定価：本体五、五〇〇円(税別)

朝日カルチャーセンター・京都教室

〒604-8005



京都市中京区河原町三条上ル京都朝日会館8階
tel: 075-231-9693

<https://www.asahiculture.jp/kyoto>

詳細はwebへ→<https://www.shibunkaku.co.jp/>

◆お申し込み・お問い合わせ

朝日カルチャーセンター・京都教室【要予約】

◆受講料(資料代を含む)

一般:3,024円(会員:2,700円)※税込

◆定員 各回20名

◆会場 朝日カルチャーセンター京都教室

日常語のなかで、

歴史的語源や

エピソードを取り上げ、

研究者が専門的視野から

ご紹介します。

日常語の なかの歴史 19

いち市

今や買ひ物は、パソコンや携帯電話一つで手軽にできる時代となった。活気溢れる朝市や歳の市、縁日市などの馴染み深い光景に加え、近年はこうしたデジタル空間も、交換売買の場として主流となりつつある。

人々の生活と結びつき、賑わいを生んできた「市」の歴史は古く、かつては神の住む世界と俗世の架け橋である「虹」の立つ地にこれを開いて、交換売買を行い、神を祀るべきとする習わしがあったという（中右記）。現代の姿と異なり、市は本来、神と接し向き合う非日常的な空間と考えられていたのである。

一三世紀末成立の『一遍上人絵伝』には、川辺の小屋に陳列する商品を求めて賑わう市の景観が描かれる。当初、不定期開催だった市は、特定日に開かれる形（定期市）が中世に一般的となり、交易の需要が高まる中世後期には、定住者や常設の「見世棚」も現われ、町の様相を呈していく。

この頃には、市の由緒や優劣をめぐる争いも起こるようになる。摂津国住吉市や大和国三輪市を市の

始まりと説く伝説が、近江や会津など有力商人の活動地域に流布するのは、市が商売の根拠（原点）として意識されたためだろう。その重要性に着目した戦国大名も、商人誘致や保護をはかり、時に賑わいを求めて自ら市を立て、地域経済の要とした。

八の日に立つ定期市を名の由来とする八日市（滋賀県は、中世より、伊勢と近江を結ぶ八風街道（国道四二号）沿いに立ち、保内ら湖東の有力商人が集う中心的な市として栄えたことで知られ、市の伝統とその名残を今に伝える（今堀日吉神社文書）。

このように、交通路沿いに残る「市」を冠した地名は、地域経済における要だった市の姿を彷彿とさせる。だが、その中には近世以降、近隣の城下町に吸収されたり、時代の流れと共に消滅したりした市も少なくない。

また、かつて市には、出合いを求めた人や芸能民が集う場としての側面もあったという。私たちの住む地域には、はたしてどんな市（地字）が残っているのか。「買ひ物」がてら探しに出かけてみると、そこに新たな発見や出合いがあるかもしれない。

（長澤伸樹・仙台市博物館）

ていーたいむ

近代数寄空間を 煎茶文化でよみとけば

このたび『庭と建築の煎茶文化——近代数寄空間をよみとく』が上梓されます。本書はこれまで茶の湯の空間とみられてきた近代数寄空間に煎茶の要素を見出す、画期的な視点を提示しています。

●煎茶文化との出会い

司会…まずは本書のキーワードである煎茶に注目したきつかけからお聞きします。

麓…わたしは縁があつて一九九一年に現職の名古屋工業大学に呼ばれることになり、今後の自分の研究を見つけないかと思つたときに、前職の文化財修理で最後に関わつた黄檗宗おうはく寺院の關係で何かできないかと思ひました。萩の東光寺というお寺でした。そこで煎茶の茶室があつたとか、煎茶を以前やつていたとかい

尼崎博正あまき ひろまさ
(京都造形芸術大学教授)

麓 和善かみもと かずよし
(名古屋工業大学大学院教授)

矢ヶ崎善太郎やがさき ぜんたろう
(京都工芸繊維大学准教授)

司会・武藤夕佳里むとう ゆかり
(京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター客員研究員)

う話を聞いていました。抹茶の研究者はすでにたくさんいますが、その当時、建築史で煎茶を研究している人という横山正先生くらいでしたから、これはやっていけると思つて煎茶席を研究することにしました。

矢ヶ崎…わたしが麓先生とはじめてお仕事をしたのは淡交社の『茶道学大系』(二〇〇〇年)でしたね。

麓…中村利則先生が担当された「茶室・露地」の巻で、「君は煎茶の研究をしているから文献史料から煎茶席のことを書いてくれ」といわれて、煎茶の茶書と茶会記(煎茶会図録)を使つた論考を書きました。その時は、中村先生や矢ヶ崎先生たちが何人かで抹茶の文献を調べている一方で、煎茶はわたし一人で孤軍奮闘していました。

矢ヶ崎…以前は、茶室研究者である中村昌生先生に付いて近代和風建築を調査に行くことがよくありました。そのころ、今我々が見て、「あ、これは煎茶的な雰囲気を持つているね」というような建築は、主流をはずれた和風であるとか、趣味がちよっと違う建築であるという感覚でいました。けれども、昌生先生はすでに何か気が付かれていたと思うのです。そのころにお酒の席で、「これからは煎茶を勉強する必要があるかもしれんぞ」とおっしゃっていました。

●近代数寄空間と煎茶趣味

司会…「近代」の数寄空間の特徴とはどんなものでしょうか？

矢ヶ崎…建築においては近代って特別なのですよ。もちろん近世と連続してはいるのですけれども、西洋の文化を意識せざるを得なくなつた時代ですから。たとえば洋風建築が怒濤のように入り込んできた、あるいは教育機関も変わった、そういった劇的な動きのなかで和風が成立していく。

麓…わたしはもともと特に近代を意識していなくて、とにかく煎茶席の研究をしていました。近世の煎茶席はいくつか知られていて、代表的なものでは山紫水明処さんしすいめいじょや成巽閣三華亭せいせんかくさんげうてい、楽々園らくらくえんなどがあったので、それらをまずは調べて、その後、他に煎茶席の遺構がないかを見ていったのです。ちょうど、その頃から近代和風建築が文化財指定されはじめて『月刊文化財』で紹介されるようになりました。それを見ていて、必ずしも煎茶席じゃなくても、煎茶席の意匠を持った近代和風建築があることに気づきました。

ただし、近世の住宅と近代の和風建築が違うことは分かるのですけれど、じゃあ何が違うかはあまり明確じゃなかつた。けれど、も近代和風建築のなかの煎茶的要素をピックアップしていくと、それこそが近世との違いだということが見えてきました。煎茶席自体は江戸後期からありましたが、その要素が和風建築にどんどん影響を及ぼしていくところが近代らしさである、そんな捉え方をできるようにしました。一方で、煎茶席にみられる中国趣味的なものもすでに近世からあるのですから、近世と近代の連続性もあるのです。

司会…尼崎先生はどうして数寄空間の研究に関わられるようになったのですか？

尼崎…わたしは植治うゑじ（七代目小川治兵衛）研究ですよ。別に近代に興味があつたわけではなくて、植治という人物に注目していくなかで、近代の庭園とはどういうものなのかと考えるようになりました。鈴木博之さんとか、小野健吉さんは、近代の庭はそれまでの象徴性を払拭して、自然主義的になるといつていますね。わたしのことばでいえば、「歌枕の庭園から五感で味わう庭への転換」です。みんなが何かしら変化を感じているわけですが、ポイントは自然観なのです。それに煎茶という視点が深まっていくのは、間違いなく小川後楽先生と一緒に庭園を調査したり研究したりしているなかでのことでしょうね。

煎茶・小川流家元の六世・小川後楽先生（二〇一六年逝去）とお会いしたのが一九九九年でした。わたしが主催している植治研究会に、後楽先生に入ってもらつたのです。それで、後楽先生から



尼崎氏

いろいろと煎茶文化の話を聞いていたうちに、今まで見てきた庭のなかに、「あれ？これは煎茶の空間なのでは」と思えるものがたくさんあることに気づいたのです。分析していくと、東京の『名園五十種』と、京都の『京華林泉帖』という明治末の代表的な庭園

の写真帖にも、そういうものがありありと見られたのです。

矢ヶ崎…小川先生をお呼びするきっかけになったのは、東山大茶会でした。大正一〇年（一九二一）に京都の東山一帯で催されたこの茶会を素材にして、当時の茶会の場を検証しようという時に、茶会といえば抹茶だろうと思っていたのが、実は半分が煎茶の席だったということに気が付きました。

司会…矢ヶ崎先生でも、茶会といえば抹茶だろうと思つてらっしゃったんですね。

矢ヶ崎…そうですね。それで、煎茶会つてどういう会なのかということを知る必要を感じたわけです。

司会…植治研に小川先生をお招きして、煎茶文化を改めて認識したことで、それまでにかフワフワしてよく分からなかったものが、スーツと見えてきたという感じですね。

矢ヶ崎…あと、これは小川先生にお会いする前の話ですが、對龍

山荘のお茶席を、茶の湯をやっておられた方と見に行ったことがあります。あそこは茶席の横に水の流れるのですが、それがうるさいといったのですよ。茶の湯は静寂の中で、襖を閉める音なんかを楽しむもので、ここでは茶会はできませんね、と。その話を聞いて、それまでは、茶の湯の茶室です、と説明していたのに、これってなんだろうと思つたのです。そういう経験が何度かあって、茶の湯の空間というだけでは説明できないものがあるのだと少しずつ感じ始めたというのがあります。

●煎茶文化とは

司会…ところで、我々がいまテーマとするところの煎茶とはどういうものなのかを少し整理しなければいけませんね。

龍…わたしが煎茶席に関する講演をする時に、煎茶というと、ふだんごくごく飲むお茶だと思っちゃうものですから、そうではなくて、それを芸術にまで高めたものが煎茶道なのだとお話しします。煎茶道の世界は日常で飲む煎茶とは、もう全く別の世界なのです。ほんのひと雫、舌先に落としただけで、その旨味とか香りとかがふわっと広がる、そんな世界なのですよという話から始まります。

矢ヶ崎…小川先生もよく語っておられましたけれども、例えば五山文学の中でも、茶を煮るといふ表現がたくさんあって、煎茶をやっていたことは確かです。しかしそれが一定の文化的な姿を形成したのは売茶翁高遊外（二六七五—一七六三）のあたりだと思えます。文雅な環境に憧れた人たちが生まれてきた、その時代から我々が対象としている煎茶があるのではないのでしょうか。



麓氏

麓…わたしも今の煎茶道に繋がるのは売茶翁からだと思っています。売茶翁は精神的なものを非常に重視していて、当時の文人たちに支持された理由もそれでした。その一方では、抹茶の世界が町人茶になっていって、だんだんと利休の頃の精神性が失われていった。当時の文人たちが煎茶に惹かれていったのは、その反動があると思います。もう一つは、江戸時代の中国趣味でしょう。

煎茶は後発ですから、抹茶に対する意識というのはすぐあつたと思うのですよね。建築を作る上でも、抹茶のように閉じた狭い空間ではなくて、広い、眺望を楽しむような空間が志向されたのだと思います。そうすると室内からも眺望を楽しみたいので、景色のいいところを選んで、すると高いところにあつたほうがいいので高床にして、高床にすると落ちるといけないから、縁と高欄もつけて……と、だんだんと抹茶とは違う建物になっていったのでしょうか。室内意匠にしても、中国に憧れを持っていますから、

唐物を珍重しはじめる。その結果、煎茶独特の空間ができてきたのだと思います。

矢ヶ崎…江戸時代初めの『茶譜』という茶書には、「囲い」という建築と、そうでない茶室があるのだということを言っています。「そうでない茶室」というのは、開放的で、床の間に掛け軸をかけておく

と風で揺れてしまつて都合が悪いと書いてあります。それはどう考えても、我々が考えている煎茶趣味の空間に通じるのです。のちの煎茶的なもの、抹茶的なものはずっと共存してあつたわけですから、ただそれを、煎茶の初期の茶室なのですかと言われると、そこにはやはり断絶があると思います。直接、江戸後期以降の煎茶席に繋がるものではないということは言いたいですね。

司会…売茶翁は風光明媚な開けたところで茶を売り始めたといわれていますね。野で茶を飲む、お金を取つて売る、それが建築や庭を必要としないところから始まつているというのが面白いなと思います。

●煎茶的要素をいかに説明するか

司会…茶の湯には伝統の中で培われてきた形があつて、それゆえ他者に共有するときに非常に伝えやすいですね。一方、煎茶はなかなか形として示すことができないと感じることが多いです。

麓…わたしが煎茶席の研究に着手し始めた頃、何人かの煎茶の家に「煎茶の茶室ってどんなですか」って聞いたことがあるのですが、家元たちは、「座敷があつたら煎茶はできる。だから煎茶の茶室なんて考えたこともない」といういい方をしていました。でも三華亭にしても楽々園にしても、これは普通じゃないから、その普通じゃない要素を抽出しました。文献史料と遺構の両方からね。そうやって先ほど述べたような要素をまとめることができました。

司会…尼崎先生は、煎茶的な空間性を見る上で、水の使い方に注



矢ヶ崎氏

目されていますね。

尼崎…近代の庭を見ていると、眺望とか周辺環境と一体となった庭づくりをしている。その中で水の「流れ」のデザインにもこだわっています。植治がかかわった南禅寺界限はその代表ですが、彼は、流れを基調とする、躍動的な水の表現が得意でした。

煎茶に親しんでいた住友春翠は、慶沢園に喚魚亭という床が高く水に張り出した建物をしつらえました。そこでは清らかな水と一体となった、開放的で眺望がよくて、という庭園と建築とがリンクした空間づくりがなされている。大雑把な掴み方ではあるけれど、こうした庭がどうやら煎茶的らしいとわかってきました。庭だけ見ても煎茶の庭ってわからないのですよね。「降り井」でもなければ。そこにある建築が「これは煎茶席やで」と言われて、ようやくいろいろな分析が可能になっていくのです。

司会…たまたまこの間、東京の渋沢史料館に行ってきたのですが、飛鳥山の眺望ってすごくいいですよ。渋沢栄一が煎茶を嗜んでいたのかは知りませんが、あの眺望は煎茶向きだと感じました。**尼崎**…近代の東京の庭園はほとんど高台にあって、低い土地には茶の湯の庭がいくつある程度です。海岸には一切ないしね。ただし、それは煎茶の流行と一対一で対応するわけではありません。

当時の健康思想があるでしょ。乾燥したところ、衛生的なところに住みましようよというね。ですから、初めから眺望がいいからではなくて、健康にいいところを選んだら、眺望もよくて、「これはええやないか」といつて広まったかもしれない(笑)。どちらが鶏か卵かわからないけれども、事実関係としてはそうだといいことでしょうか。

とにかく眺望だけでは話ができないし、水だけでもできない。そうになると、なんでわたしたちは煎茶を取り上げるのかということも改めて問題になりますね。近代数寄者たちは、決して眺望がありがたがったわけではないのですよ。そうではなくて、今までの茶の湯的な閉鎖的な空間に全然こだわらなかつたという側面が見えてきます。抹茶と煎茶の「対抗」はあつたけれども、それは派閥というか、世をリードするという意味での対抗であつて、実はどちらに属する人も同じことをやっていたのかもしれない。わたしはもう、説明のしようがないから、近代自然主義、自然回帰が叫ばれた時代の必然的なものと理解しています。抹茶も少なからずそういう方向に向かつていたし、煎茶はもともとそうだったし。

●研究のあゆみ

司会…近代数寄空間にみる煎茶的要素をとらえようという先生方の研究は、分野も違う、所属もちがうメンバーで進めてこられました。

矢ヶ崎…平成一五〜一六年の最初に科研に応募するとき、煎茶を

テーマに挙げるのは、かなり冒険だったかもしれない。麓先生はその前から取り組んでおられたし、我々にとつては必然だったのですが。審査する先生が、煎茶つて分かってくれるのかなってという不安がありました。

尼崎…どの分野に出すのかが問題でした。

司会…途中からは、麓先生に入っていたら、本格的に全国の遺構をみて回りました。わたしも一緒に回る機会がありました。そのときの先生方が水を得た魚のように研究に没頭される姿は見ていて面白かったです。みなさんが一緒に同じ場に行かれると、化学反応といえますか、思いがけない出会いや発見が次々に起こるのだなと、強く思いました。

矢ヶ崎…小川先生に来ていただいて、一緒に話をしたというのが大きかったですね。

司会…後楽先生は煎茶家である一方で、歴史家としての冷静な見方もお持ちでした。七宝史の研究を専門とするわたしに、ある時、後楽先生が、「煎茶も七宝も、近代初期には盛んだったのに、時代とともに歴史の中で失われて来た事実があるでしょう。それを掘り起こすのは非常に面白い、重要なことなのですよ」とおっしゃってくださったことが印象に残っています。

矢ヶ崎…小川先生は本当に楽しく全国を一緒に調査してください。たのですが、一昨年出された『漱石と煎茶』（平凡社新書）を読んで、今の世の中のために、煎茶を文化として語らなければいけないのだという強い使命感をお持ちだったのだということも知りました。
司会…使命感もあったのでしようし、煎茶というものを好きでい

らっしゃいましたよね。煎茶を通して、新たな生活の楽しみを知っていたきたいという思いが大きかったのかなと思います。大仰に言えば、この本を作るといことは、わたしたちにとっては何らかの使命ですね。

尼崎…まあはじめですね、中途ですけど（笑）。煎茶はいろんな視点から研究されているわけですが、その中で、建築と庭、あるいは近代数寄空間というくくりで研究した成果は、これが初めてじゃないですかね。そして今回の本は、単にそれぞれの研究を集めたのではなくて、一緒に見に行つて、その中であるものを共有し、各自の研究に反映していった成果でもあります。

司会…この研究を始めたころ、例えばどこかへ調査に行く時に、先方に相談すると、「え、うちは茶の湯の遺構はありますけど、煎茶なんてありません」と言われることがほとんどでした。でも今は、当時そう仰つていた施設でも、煎茶の展覧会とか、煎茶と銘打った催事などをやるようになって、「煎茶」を目にする機会がびつくりするほど増えてまいりましたよね。

尼崎…近頃は「尼崎先生、煎茶の庭がありました」とか言われることも珍しくなくなりました（笑）。みんなが関心を持ってきたのですよね。「ひよつとしたら煎茶ちゃうか」という意識で庭や建築を見るようになってきたことは確かですね。

（平成三〇年三月一〇日 於・思文閣）

ユネスコ無形文化遺産に登録された 「和食」を知るために

江原 絢子
えはら あゆこ

食文化ということばは比較的新しく、一九六〇年代に使われ始めたが、一般化するのには八〇年代以降といえよう。私が調理学の実験の世界から食生活を歴史的な視点で研究しようと方向転換をした一九七〇年代は、家政系大学ではまだ、食文化という科目はなく、食物史または食生活史の科目名で呼ばれていた。

それらの科目の担当者の多くは、歴史学などを専門とする非常勤講師であった。家政系の食物関係の研究者のほとんどが、自然科学系の研究者だったからである。そのため私の研究もしばらくは、学問とも認められることが少なくやや異端視扱いされていた。それが、今は食文化ということばを知らない人はいないほどになった。二〇〇五年の食育基本法制定により、「食文化の継承」などにも使われ、家庭科の教科書でも、また多くのメディアでもしばしば「食文化」は定義のないままではあるが使われて市民権を得た。

二〇一三年、ユネスコ無形文化遺産に「和食・日本人の伝統的な食文化——正月を例として」が登録された。国と連携しながら、「和食」の保護・継承に責任を持つ組織として一般社団法人和食

文化国民会議（略称：和食会議）が実質的活動をはじめたのは、二〇一五年四月のことである。

私は、熊倉功夫会長のもと副会長の一人として、また調査・研究部会長としても業務に携わることになった。その折、企画した一つが「和食」に関わる本を出すことだった。検討の結果、一般の方にも和食文化を理解してもらうため、手軽に読めるブックレットの形とした。一〇巻を一期として刊行予定をたて、熊倉会長からお願ひしていただき、思文閣出版での出版が決まったときには本当にほっとした。

一月二四日の「和食の日」には、第一巻『和食とは何か』を刊行することになった。しかし、熊倉会長と私が書くことに決まっていたものの分担や内容が決まったのは、八月も過ぎてのことだ。締め切りまでわずかしかなかった。

同書の末尾には、ユネスコ無形文化遺産への提案書を英文と和文で掲載することになっていた。同書はその解説書としての機能を持たせることも必要だった。登録された和食文化の内容をきちんと伝えるために、何度か提案書を読み直すことになった。

ユネスコ（パリ）勤務（執筆時）の七海ゆみ子氏著『無形文化遺産とは何か』によれば、ユネスコ無形文化遺産（無形文化遺産の保護に関する条約）は、世界遺産（世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約）とは異なる条約で、世界遺産条約の約三〇年後の二〇〇三年に生まれた。無形文化遺産は、世界遺産のように特別に価値あるものが選別されるのではなく、文字に頼らない口承伝統や知識、技能など、消えてしまうと二度と戻せない「人類の遺産」として残す文化である。そして、それは、動かない遺産ではなく、環境や自然、歴史に対応して常に創りなおされていくという特徴を持つ。「和食」の提案書においても「和食」は、生活の一部として、また年中行事とも関連して発展し、人と自然的・社会的環境の関連性の変化に応じて常に再構築されてきた」と記され、無形文化遺産が生きた遺産として変化することを示している。また、「和食」の特徴ともいえる基本的な精神として「自然の尊重」が挙げられている。この基本精神を中心にしてみると、「和食」の特徴のすべてが説明できる。

多様な食材は、最初から多様だったのではなく、各時代に伝来した農産物などを各地の自然に合うよう改良・定着させたものであり、自然の恵みを最後まで使い尽くす工夫をするために技術が発展したことも、自然環境の「資源の持続的利用」と関係している。

また、行事や行事食の成立には、自然の中に神を見出し、祈り、供物、共食を行ってきたことが深く関わっている。多様な食材を組み合わせた食事の形を長い間継承してきたことで健康への寄与もあり、これらを家族や地域の人と作り、共食することで絆を深

めてきた。

さらに、器や食材を選択して季節感を大切に作る料理も自然を尊重するところの発露である。ブックレットでは、このような内容を盛り込むとともに、現代の食生活の実態もデータをを用いてその変化を追って、同書を完成させた。

二巻以降、「年中行事としたり」「おもてなしとマナー」「和食と健康」「和食の歴史」「調理と食材」「うま味の秘密」「ふるさとの食べもの」「和菓子と日本茶」「和食と日本酒」の各巻が、最後の巻を除きすでに刊行された。熊倉先生とともに、全巻の編集を担当し、思文閣出版の担当者と相談しながらなんとか、進めることができた。これを多くの方に読んでいただき、「和食」文化の魅力を知ってもらえたらと願っている。

いつかフランスの方が、ある会の中で、「日本人はせっかくよい食文化があるのに、その自覚が不十分で、海外の人にその良さを説明できるだけの知識と誇りを持っていないのは残念だ。自国の食の歴史を把握しその良さをアピールするべきではないか」と発言された。学生に「和食」文化を講義すると、感動する者が多い。若い世代でも自分が経験しなかった歴史を含めて理解し、和食文化に魅力を感じ、誇りを持つことができると期待したい。

（東京家政学院大学名誉教授）

茶の湯空間からの近代

桐浴邦夫 きり せきこくにか

日本の伝統建築である茶室や数寄屋は、二〇世紀の世界をリードした建築であった。というとき、ずいぶん偏った視点ではないのか、それは大袈裟な、というそりしが聞こえてきそう。現代の感覚からするとそうかも知れない。しかし一九世紀後半から二〇世紀中頃にかけて、茶の湯空間を代表とする日本建築は大きく世界から注目され、また最初は気付かなかった日本の建築家たちもやがてその視点を持つようになった。

そもそのきっかけはこうだ。西洋人たちは茶を求めてインドから東南アジア、そして中国へと進出してきた。彼らは東洋でも中国のことはよく知っていた。パロックの邸宅に中国風の部屋をつくることはしばしばであったが、鎖国していた日本のことはほとんど知られることはなかった。そして産業革命が起き、西洋が建築の近代化を進めようとした時、大きく立ちはだかつたのが新しい材料に伴うデザインの問題であった。これまでの西洋建築の中心であったヴォリュームのある石材から、細い鉄材に変化させようと模索を始めた。日本建築は木造が発達し、それもことさらに細い材料を使用する繊細な建築が造られてきた。茶を求めてやっ

て来た日本には、鉄材のヒントになる細い木材による建築文化があったのだ。彼らが飛びつかないわけがない。多くの西洋の建築家たちは直接あるいは間接的に日本建築に興味を持つようになった。

ところで、昭和八年に日本にやって来たブルーノ・タウトは、桂離宮を絶賛したことで知られている。しかしここ二〇〜三〇年ほど前から、タウトの言葉は日本の建築家によって「つくられた」ものとの説が出回るようになった。はたしてそうだろうか。タウトの言説を丹念に調べていくと、彼はドイツ在任時から日本に興味を持っていて、ドイツでは日本のことがあまり伝わってこないと残念に思っていたそう。一方イギリスにはある程度伝わっていて、ウィリアム・モリスらに憧れていたと述べる。また来日前には数寄屋建築にも興味を持っていたとも言う。

西洋人たちの注目には、日本建築の自然との関わりの深さにもおよんだ。じつはそれにさかのぼること約三〇〇年、桃山時代に日本にやって来たポルトガル人ジョアン・ロドリゲスは、キリスト教の布教をすすめる目的で日本についての事を細かく調査してい

た。やがて禁教令が發布され本来の目的は失われたが、一方で冷静に観察していた日本の記録は第三者の視点として貴重なものとなった。彼の大きな注目点に、自然との関わりがある。とりわけ自然である小さな露地に囲われた小さな茶室の中に自然木をそのまま使用していることに大きく注目する。西洋においては自然と人工は対立する概念であった。

さて、話題を近代に戻そう。開国直後、日本にやって来た彼らは日本のさまざまなものに興味を持った。とりわけ茶と木造建築、そして建築における自然との関わりに大きく関心を寄せたのである。石材による分厚い壁で内外を明快に区分する建築から、鉄やガラスといった新しい材料により、内外の境を打ち壊そうと試みるのだが、参考にしたのが日本建築、とりわけ茶室や数寄屋であった。と言うと再び反論が聞こえてきそうだ。茶室は壁で囲われた閉鎖的なものではないかと。もちろんそういった側面もある。しかし、ロドリゲスは茶室を自然との関係が深い建築として紹介していた。本来室内に持ち込まれることのない自然の丸太や土そのものに囲われた狭い部屋には、内外を曖昧に扱った土間底空間を備え、人工的に整えられた自然である露地へとつながる。さらにその影響を受けた数寄屋建築においては、大きな開口部を持ち、縁や庇の複雑な構成によって自然と人工を緩やかに結びつける。これは決して安直な建築ではなく、深い思想によって形づくられている。またそれらは、高い技術を駆使しているが、そのことを感じさせない表現に、茶人や職人たちの品格を見るものでもある。

もう一度近代に戻ろう。明治から昭和前期に活躍した建築家武

田五^{ごいち}一は、帝大の卒業論文で茶室建築についてまとめる。現代の進んだ研究から見れば拙いものであるが、これを近代建築の論文として読むと違った側面が見えてくる。武田は千利休にのちのモダニズム建築にも通ずる、簡素さや、左右非相称などといった側面を見ていたのである。ただ利休以降のものに対しては評価が低い。それは近代まで続くものと見て、彼の実作としては積極的に扱われていない。一方昭和に活躍する堀口捨己^{すてみ}ははつきりと言う。現代建築として千利休を研究すると。堀口においては利休以降も評価が高い。モダニズムの時代に活躍した堀口は、常に茶室と近代建築を両輪で扱っていた。またこの時期、多くの建築家たちが茶室を語り、その精神や空間構成などを作品に取り入れようとしていたのであった。

さて、筆者はこのたび『茶の湯空間の近代』を上梓した。じつは「茶の湯空間からの近代」などとしても良かったか、とはあとから思うことである。これは内容に右記のようなことを一部含むからである。近代建築はブームである。保存や活用が叫ばれている。しかし残念なことに、茶の湯空間について理解している人は極めて少ないのが現状である。本書はその基礎になる考え方を示したものである。また、本書を少しでもお読み頂けるように『茶の湯空間の近代』の読み方」を拙ブログ〈<http://k-soho.hatenablog.com/>〉にも記した。茶の湯空間への理解を深めることに、本書が毫厘でも役立てれば幸いである。

(京都建築専門学校副校長)

ある地方大学の

国際シンポジウムの舞台裏

藤原貞朗

大学を襲う「二〇一八年問題」をご存知だろうか。これまで二〇万人前後で推移してきた一八歳人口が二〇一八年に減少に転じ、多数の大学が経営危機を迎えようとしている。そのため、とくに地方大学は生き残り戦略を打ち出すのに必死だ。一例として、私が勤める茨城大学が二〇一六年に開催した「国際岡倉天心シンポジウム」の話、とくに舞台裏の〈ここの話〉をしたい。

このシンポジウムは通常の地味な研究会とは趣きが違った。外国人三名と日本人二名の「岡倉研究者」による発表の前に、学長と日本美術院理事が挨拶を、そして、前文化庁長官が基調講演を、恭しくも行ったのである。また、地元企業を中心に三〇以上の「協賛パートナー」がシンポジウムに協力し、当日は会場の水戸駅前の立派なホテルに、様々な官民団体と企業関係者と大勢の市民が集まった。どこかの名士の披露パーティと見紛うほどだった。実は、このシンポジウム、大学の理事や社会連携事業を担当する職員が奔走し、三〇〇万円を集めて実現したもの。はやり言葉でいえば、地方創生と産学連携を謳った大学を挙げての一大イベントだったのである。

こんな鳴り物入りのイベントをする大学の目的は何なのか。単に研究の進展を願うことでも、教養を提供したいわけでもない。研究のためなら、集めた資金を年々減少する一方の教員の研究費に充当するとか、新たに研究者を任期付きでも雇用する方がいい。教養を提供するなら、地道な勉強会を定期的に行う方が効果的だ。それでも大学は大きな打ち上げ花火を優先した。その理由を説明するには、そもそも茨城大学がなぜ岡倉天心（一八六三～一九一三）なのか、歴史的に説き起こすことから話す必要がある。

東京美術学校校長として、また日本美術院の創設者として活躍した岡倉天心は、晩年の約一〇年を茨城県北部の五浦で過ごした。今なお五浦には、彼の旧邸と長屋門、そして海に面した六角堂が残っている。茨城大学は昭和三〇年にこれらの遺構を岡倉天心偉績顕彰会から移管され、そこを五浦美術文化研究所として保存管理することになった。大学の美術系と歴史系の教員が所員を兼任し、保存研究活動に従事した。とはいえ、当初の研究所の活動は地味だったようだ。大学には国から潤沢な予算が与えられ、研究所も十分な活動資金があったので、派手なイベントでアピールし

て資金調達する必要もなかった。皮肉な話だが、お金があるほど表向きの活動は地味になるもので、逆にいえば、大きな花火を上げる大学ほど窮状にあるのだ。

にわかに大学と研究所が変わり始めるのは二〇〇〇年を迎える辺り。岡倉の英文著作『茶の本』が再評価され、邦訳が続々出される頃のことだが、国立大学が独立法人化した。国の補助金が年々減少することになる。これに伴い、大学は研究所を重要な観光資源とみなし、入場料をとる方針を固めた。当時は年間一〇万人の訪問者があったから（震災後は七万人に減少）、二〇〇〇円の入場料で二〇〇〇万円の収入になる（現在は三〇〇〇円に値上げ！）。これを研究所の維持にあてた。それでも、当時はまだ講演会や茶会以上のイベントは求められなかった。

そんななか二〇一一年に大きな転機が訪れる。東日本大震災の津波で六角堂が消失し、全国の注目を浴びるとともに、公私団体と個人から五〇〇〇万近くの寄付金や義捐金が寄せられたのである。被災地復興の象徴とすべく、六角堂の復元にすぐさま立ち上がったのは、研究所の所員ではなくて……、当時の学長だった。そして、僅か一年で六角堂を復元し、各種メディアの注目を集めた。また、不謹慎な言い方だが、これを好機とばかりに「天心・六角堂復興プロジェクト」が学内に立ち上がり、広報係の職員やボランティアの学生が各種行事を企画した。研究所は保存管理の場所から、資金集めの広報の場にまたたく間に変わってしまった。そして、震災から五年が経ち、復興を象徴するイベントとして、盛大な国際シンポジウムの開催が画策され、官民団体や各種企業の

協賛を得て実行されたというわけである。

学者肌の研究者には納得ゆかない変化だろう。被災者が仮設住宅の生活を強いられるなか、また、まだ大きな余震が続くなか、復元やイベントは慎重にすべきではないか。しかし、大学は復元を急いだ。二〇一三年に岡倉天心没後一〇〇年という節目が控えていたことも影響した。とにかく、ここで社会にアピールせねば、大学運営資金がどんどん削られる。あわよくば、外部資金を継続的に得たい、入場料も上げてはどうか、と大学は前のめりになった。これが、ここの地方大学の現実の一例である。その現場について分かったことがある。研究所はテーマパークではない。お金はかかるが、お金には絶対にならない、ということだ。少なくとも研究者はこれを肝に銘じつつ、前のめりの大学に乗りかからず、ほんの少しであろうと学術成果を出し、学者としての責務を果たす必要がある。

というわけで、この二月にシンポジウム報告を中心に、六角堂復元のプロセスと岡倉天心ゆかりの遺品紹介を付録とした『岡倉天心 五浦から世界へ』と題する本を上梓したいのである。な　　　　　んだ、結局は広報じゃあないか、との謗りを免れないかもしれないけれど。

（茨城大学教授・五浦美術文化研究所長）

デザインの二五〇年

岡 おか
達也 たつや

本年（二〇一八年）は、明治元年（一八六八）から一五〇年を迎え、各地で明治をテーマとした記念事業、展覧会などが開催されている。明治といえは、日本が近代国家として出発した歴史上の転換期で、政治や法制度、言語、教育をはじめとして、あらゆることが富国強兵・殖産興業の旗のもとに変革された時期である。

デザイン分野においても始点のひとつとなるのがこの明治という時代である。当時の日本は万国博覧会への参加を通して自国の生産物を輸出し、外貨を獲得することに力を入れていた。現代の「デザイン」といえば、家電製品や広告などの大量生産品が真っ先に思い浮かぶが、当時はもちろんそのような製品ではなく、今では美術工芸品とされるような陶磁器や染織品、漆器、金工品といったものである。これらの工芸品が海外で需要があるという点とで、その改良に「デザイン」が導入されたのである。納富介次郎（のりとみ けいじ一八四四～一九一八）という人物が英語の *design* を日本語の「図案」に翻訳した、ということが近代デザイン史において語り草となっているが、輸出用の工芸品を量産する近代的な生産体制を整えるために必要となったのが「デザイン」であり「図案」だった

のである。

筆者の研究対象は近代日本のデザイン史であり、当時の学校教育へのデザインの導入が主要なテーマのひとつである。学校教育におけるデザインのあり方を示すものとして、当時のデザイン教育機関の学科名をここでいくつか紹介したい。例えば、東京美術学校（現・東京藝術大学）は明治二九年（一八九六）に「図按科」を新設し、東京高等工業学校は明治三二年に「工業図案科」を設置している。同校工業図案科は大正四年（一九一四）に廃止されたが、その後、大正一〇年に東京高等工芸学校（現・千葉大学）が新設され、「工芸図案科」に継承されている。一方、関西では明治二四年に京都市美術学校（現・京都市立芸術大学）が「工芸図案科」（のちに「図案科」に改称）を設置し、明治三五年に京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）が「図案科」を設置している。これだけみても「図按科」「図案科」「工芸図案科」「工業図案科」が使い分けられ、当時の社会背景や教育方針、指導者たちのデザインに対する考え方が複雑に絡み合っただけでなく、名称として表出しており、「デザイン」「図案」という簡単な図式では言い表せないのではないかと感じて

いる。本来「デザイン」の訳語であるはずの「図案」は、もともとの意味とは少し異なる日本独自のデザイン概念なのかもしれない。

少し話は変わるが、この数年、研究と並行して日本国内のデザインアーカイブに関する調査事業にも関わらせていただいた。国内のグラフィックデザイン資料の所在状況についての調査を目的のひとつとしたもので、資料の収蔵、管理や公開状況について博物館・美術館を中心に担当する学芸員の方々に話を伺う機会も多く貴重な経験となった。研究者として対象とする時代の資料を参照できるのも、それらが各施設にきちんと保管されているからなのであるが、複製品であることが基本であるデザイン作品は美術作品と異なり、そもそも作品として扱われないということも少なくない。加えて作品に関連する膨大な資料や草稿類ともなると、さらに状況はよくない。保存の必要性は共通認識としてありながら、まだその基準となる方法が確立されておらず、各施設が独自に試行錯誤しているというのが現状である。

こうした作品や資料に関する情報の公開については、さらに難しい状況を抱えている。例えば、グラフィックデザイン資料の主要なものであるポスターは、戦後の日本ではおもに広告業界でアートディレクターという職業を中心に生み出されてきた。制作はデザイナー個人でなくアートディレクターによる統括のもとでフォトグラフィア、コピーライターなど専門・細分化された集団でおこなわれ、著作権の所在も複雑になっている。一方で大量生産品であるがゆえに作者を突き止めることが不可能なものも多い。結果として不特定多数の閲覧を想定する媒体での作品の掲載は難

しく、情報が開かれないままになって資料が人知れず眠った状態になっているというケースもある。

戦後の日本のデザインに目を向けると、一九六〇年に開催された日本で初めての国際デザイン会議である「世界デザイン会議」、一九六四年に開催された東京オリンピック、一九七〇年の日本万国博覧会（大阪万博）など、ひとつひとつが日本のデザインを世界へと発信した大イベントである。昨今、二〇二〇年のオリンピックと冒頭にも述べた明治一五〇年の節目にあり、こうした近代から戦後を通覧する日本のデザインをテーマとした展覧会も開催されるようになっていくが、美術と比較すると決して多いとはいえない。これまでの一五〇年のデザインの歴史は、未来の一五〇年のデザインをかたちづくる日本のリソースであり、その価値を明らかにしていくことが近代デザイン史の研究に課せられた使命なのではないだろうか。

（京都工芸繊維大学美術工芸資料館）

並木誠士（京都工芸繊維大学教授）
青木美保子（京都女子大学准教授） 編

京都 近代美術工芸のネットワーク

二〇一七年四月刊行

A5判・三五二頁／本体二、五〇〇円

春の吹雪に

北米大陸開拓を思う

ウエルズ恵子けいこ

三月上旬に、アメリカ東海岸のプロビデンスへ資料調査に行った。出発する頃の京都では梅もほころび、重いコートを脱ぐ気温になっていたのだが、プロビデンスは寒かった。

滞在の四日目、私はブラウン大学近くのレストランで夕食をとっていて、雨が雪に変わったのが窓から見えた。道路は雨で濡れているうえにまだ午後六時だったので、雪は積もらないだろうとたかをくくってゆっくりしていたら、降り方がみるみる激しくなった。宿までは二〇分くらい歩かねばならない。あわてて勘定を済ませて外に出たが、積雪と風が激しくなって足元が不安だ。

アメリカは車社会なので吹雪の夜には歩行者など一人もなく、視界の悪い中で暴風雪と闘いながら交差点を横断する恐ろしさといったらなかった。知っているはずの風景が一面雪に覆われてしまい、濡れた靴が外から凍り始め、車は高速で脇を走り抜け、宿まであと一キロ程度の道のものになっても、刻々と激しさを増す吹雪の中では悪夢のように遠い。

まつ毛を凍らせながら、がむしゃらに歩いているとき、地味な車が一台私のそばに寄って停まった。運転席の窓に若い女性の顔

が見え、「救われた」と直感した。実は、誰かが拾ってくれるのではないかと期待する気持ちにはあった。アメリカ人はそういうところが率直で親切なのである。車中におられたご両親は移民一世らしくスペイン語しか話せず、運転手の女性は二〇代半ばに見えたが、これからブラウン大学を受験したいとのことだった。

三月にしてこんな気候の土地を開拓した一七世紀の移民は、どうやって冬を生き延びたのだろうか。(プロビデンス周辺の土地を先住民のナラガンセット・インディアンから購入して最初に入植したのは、バプテストのナラガンセット・ウィリアムズであった。一六三六年のことである。ウィリアムズは、マサチューセッツの清教徒入植地にイギリスから移住したものの、植民地の支配層から宗教的政治的に危険人物と見なされたため、自らの信奉者たちと新たな土地での理想的な宗教共同体の建設を試みた。)

翌日、一九世紀に書かれた研究資料を繰ってみると、気候について次のように説明があった。

ロードアイランドの気候は温暖である。一八八四年の観測では、年間平均気温は摂氏九・七度、最高気温が三四度、最低

気温がマイナス二・三度である。一番寒いのは一月で、最高でもマイナス四・二度である。

(Prescott O. Clarke, Rhode Island and Providence Plantations (Providence: E.A. Johnson & Co., 1885) p. 43.)

冬の間じゅう氷点下、一月の最高気温がマイナス四・二度で「温暖」とは驚いた。しかも東海岸は海からの風がきつく吹き付けるので有名だ。寒いと感じる基準がちがうのだろう。

北米開拓者がいかに寒さと闘ったかについては、壮絶な言い伝えが数多く残っている。たとえば、モルモン教徒の大移住に関して紹介しよう。

アメリカで始まったモルモン教会はキリスト教の一派ではあるが、『モルモン書』を聖典とする点が他の宗派とは大きく異なり、日本では正式名を末日聖徒イエス・キリスト教会という。預言者とされるジョセフ・スミスによって一八三〇年に創始され、その後、度重なる迫害を受けてニューヨーク州からペンシルヴェニア、オハイオ、ミズーリ、イリノイと西へ避難しながら信者を増やしていった。しかし迫害は激しくなるばかりでジョセフ・スミスが殺害されたため、一八四六年にはブリガム・ヤングを指導者として現在のユタ州にあるソルト・レイクをめざして約四千人が集団移動を開始した。

一八ヶ月にわたったとされる陸路の旅は悲惨を極めた。とくに、内陸の厳しい寒さに人々は苦しんだ。その経験の伝承を、二〇世紀の民俗学者が聞き取りした記録があるので、翻訳で引用し

たい。なお、聞き取りの資料はWilliam A. Wilson, *The Morrow of Human Experience: Essays on Folklore*, ed. by Jill Terry Ruby (Logan, UT: Utah State UP, 2006) p.67に引用された。

私の曾祖母は、パイオニアとして平原を渡りユタへ集団移住してきた人々の一人です。ある晩、ワイオミングにいたときに、曾祖母はある少女といっしょに床につきました。特に寒い晩で、気温は氷点をはるかに下回っていたそうです。翌朝目覚めると、その少女は凍死していて、曾祖母の長い髪が少女の硬直した身体に凍り付いていました。曾祖母が自分の身を少女の死体から引き離すには、髪を切るしかありませんでした。そのとき使ったはさみは代々受け継がれて、いまは私の叔母が所有しています。

(Mary Strong, collector, 1965, BYUFA, Call Number L35:2:2:1.)

アメリカ大陸の真ん中で来る日も来る日も飢えと寒さに苦しんだ人々。その苦難とは比較の対象にもならないけれど、私にとつて、街で吹雪に巻き込まれた経験は、生命をかけて開拓地へ赴く人々の不安と覚悟を感じた一〇分間だった。そしてまた、雪だるまになった私を拾ってくれた女性の親切に、移民による開拓でいまの国家が始まったアメリカ合衆国の、相互扶助の精神も実感した夜だったのである。

それにしても、春の京都の、なんとうららかなことよ。

(立命館大学文学部教授)

英一蝶筆「大原女図」

市井の人に寄り添う画趣

八反裕太郎
（公益財団法人 額川美術館学芸員）

「へっぴり腰」という言葉を最後に耳にしたのはいつだろう。そう思いながら、ふと気付いた。そもそもこの「へっぴり」とは何ぞや？ と。たまたま、『広辞苑』に手を伸ばし、分厚い頁を

紐解けば、「へっぴり」は「尻つ放り」と書くというではないか。そうか、なるほどと合点がいった。思わず膝を打ったのである。

いったい何が言いたいのか、と訝しく思う人が多いだろう。それでは挿図をご覧いただきたい。英一蝶（二六五―一七二四）筆「大原女図」（一幅 額川美術館蔵）である。縦長の細い画面の下部に二人の女性が描かれている。彼女たちは大原女である。大原女については説明が必要であろう。京都市北東部の大原の里より頭に薪の束を乗せて京の町へ売りに来る女性のことである。中世期の職人歌合に早くも登場するのみならず、壬生狂言にも取り入れられている。「大原女」という演目をきけば、その名に覚えのある人も多いことだろう。

以上の点を踏まえて、画面に近付いて観てみよう。まずは向かって左側の大原女である。中腰になり、尻を後ろに突き出した不安定な姿勢で薪の束を抱え上げようとしている。そう、これがま

さにへっぴり腰なのである。この大原女は小柄で非力とみえ、どうやら小束の薪ですらうまく頭上に乗せることがままならないようだ。

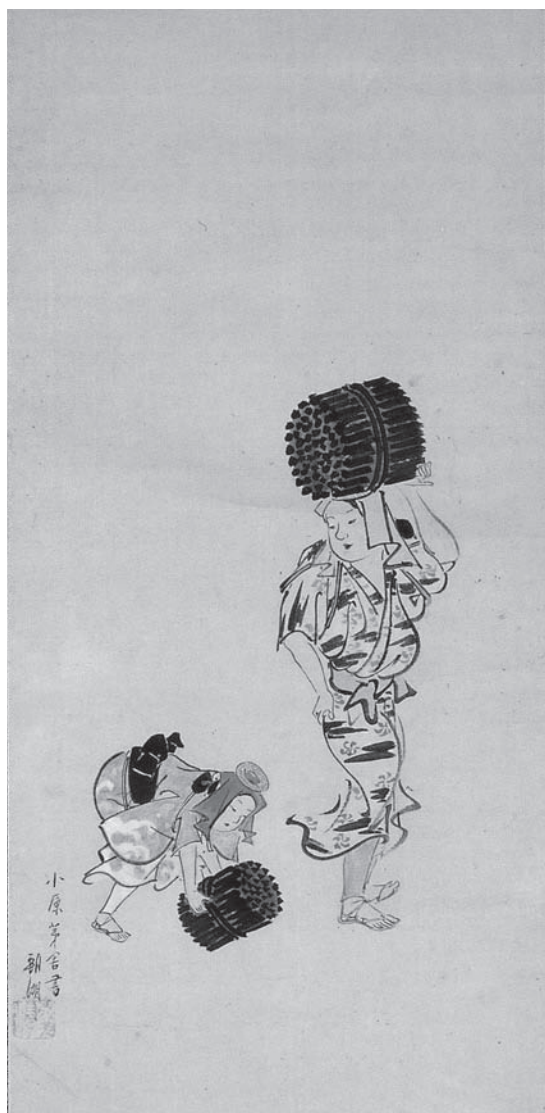
それに対して、向かって右側の大原女は、いとも簡単に軽々と大束の薪を頭に乗せ、腰に手を当てる先に記した大原女の方を振り返っている。「ほら、早よ行くで」「そんな小さい束の薪も運べへんの？」とでも言いたげな目つきが印象的だ。がっしりとした体格と相まって、その立ち姿はまるで歌舞伎の見栄を切る動作にすら思えるではないか。

大原女を二人描くだけにしても、この二人の対比が絶妙という他ない。小柄で非力な人、それに対して大柄で足腰の強さを思わせる人。小束の薪と大束の薪の描き分け。あつさりと描く作品だけにいずれも見逃しがちだが、機知に富む斯様な構図には是非とも気付いておきたい。何の術いもない。力みもない。さらりと筆を運び、まるで一筆書きで仕上げたかのような軽快さ、そして洒脱さがある。そこに難解で晦渋な所は一切ない。大向うを唸らせてやろうという気負いが感じられないだけに、実に好感の持てる

作品といえよう。

話が前後するが、一蝶の人となりについてその概略をここで記しておこう。一蝶は伊勢亀山藩の侍医、多賀伯庵の子として京都に生まれた。江戸詰が決まったため江戸に下った後、狩野安信（六一四〜八五）に師事し、狩野派の素養を身に付けるものの、破門されたという。多賀朝湖の名で町絵師として彩管を揮ったが、俳諧にも深く親しむだけでなく、漆芸家の小川破笠（二六六三〜一七

四七）とも交流があったようである。こういった一蝶の広い交友関係は注視されよう。元禄十一年（一六九八）に三宅島へ流罪となったが、絵師という生業は当地でも続けたとみえ、三宅島在住の時期の作品は「島一蝶」と呼ばれて珍重されている。「四季日待図巻」（出光美術館蔵）や「布晒舞図」（暹山記念館蔵）といった重要文化財指定の作はいずれもこの時期に制作されたと考えられている。その後、宝永六年（一七〇九）に將軍代替わりの大赦により、江戸



英一蝶筆「大原女図」（頼川美術館蔵）

への帰還が赦された。「英一蝶」と名乗ったのはこの年以降のことであり、それは没年までの僅か一五年程の期間でしかない。

ここで、本図に話を戻そう。本図はいつたい、どういった場で鑑賞したのだろうか。どのような人が注文したのだろうか。本図を前にしてどういった会話がなされたのであろう。画面左下隅には「小原茅舎書／朝湖」と記され、続けて白文方印「愛摸古」が捺される。「朝湖」落款であることより、一蝶と名乗る以前、つまり宝永六年（一七〇九）以前に制作された作品とわかる。「平安」や「京都」といった文言が款記に施されていれば、京都ではなく地方の人が注文した作とわかるが、本図にはそういった語は記されていない。まずは京都の人が注文した作とみてよい。大原女という馴染み深い市井の人に大きく寄り添った作品を楽しむ場が京都にあったことに驚かされる。

やや下の時期の長沢蘆雪（一七五四～一七九九）にも大原女を描く優品が静岡県立美術館に所蔵されているが、それについては祇園会の神輿洗という行事に伴う「祇園ねりもの」にて祇園の芸妓が花街をねり歩く仮装姿と論じたことがある。その点については、近時刊行した拙著『描かれた祇園祭——山鉾巡行・ねりもの研究』で仔細に記した。本稿と合わせて参照されたい。

穎川美術館は、江戸時代より続く大阪の商家、穎川家四代目徳助氏が収集した作品を所蔵する美術館である。兵庫県西宮市の甲東園に昭和四八年（一九七三）に開館し、今年で創設四五周年を迎える。春季展として江戸絵画の名品を展示しているので、観光も兼ねてご来館いただければ幸甚である。

公益財団法人 穎川美術館

【所在地】

〒662-0813 兵庫県西宮市上甲東園1丁目10-40
TEL / FAX: 0798-51-3915
ホームページ <http://www.egawa-mus.or.jp/>

【交通アクセス】

- 電車でお越しの方
阪急今津線「甲東園駅」より西へ200メートル
- タクシーでお越しの方
JR「西宮駅」から15分
※美術館には駐車スペースがございません。公共交通機関をご利用ください。

【開館時間】

10時～16時（最終入館時刻:15時30分）

【休館日】

開館中は月曜日、祝日の翌日

【入場料】

大人600円 大学生400円 小・中・高校生は無料
※団体割引・シニア割引等あり

【現在開催中の企画展】

平成30年度 春季展
「江戸絵画への誘い(一)」
【前期】2月18日(日)～3月31日(土)・・・17世紀の作品
【後期】4月10日(火)～5月13日(日)・・・18世紀の作品

▼今号より心機一転、紙面のリニューアルを致しました。今までより一層、お客様と書籍との出会いの場として本誌を役立てていただければ、幸いです。昨今、新聞等マスコミの報道通り、出版業界はゆれにゆれています。電子コミックスの売上が、紙のコミックスの売上を上回ったという報道は、「モノ」としての書籍の流通という点で、根本的な見直しを考えるものでした。流通コストがかからない電子書籍の利点は理解しつつ、紙の本ならではの装丁などや質感に目を配り、お客様に目に留まる書籍を刊行していきます。(一)

☆学会出店情報

小社刊行図書を展示販売

※日付は小社の出店予定日

説話・伝承学会(天理大学)	5/12(土)・13(日)
美術史学会(東北大学)	5/19(土)・20(日)
洋学史学会総会(電気通信大学)	5/20(日)
歴史学研究会大会(早稲田大学)	5/26(土)・27(日)
芸能史研究会大会(同志社女子大学)	6/10(日)
日本宗教文化史学会(京都府立大学)	6/23(土)
大阪歴史学会(大阪市立大学)	6/24(日)

▼「これって煎茶ちゃうの？」京都にはそう感じる場所が結構あります。「煎茶」的要素を探している自分に気づく今日この頃です。(M)

▼過日、特別拝観で東福寺の輪転経蔵を見た。これを廻せばお経「既読」効果があるというが、今も昔も即効性を求める人の情熱ってすごい。(大)

▼保育園は常に満員なのに大学は定員割れの予報。十八歳人口の減少はこれからが本番とのこと。出張先のキャンパスに活気があると安堵します。(理)

▼今年の桜はすごかったですね。上・中・下千本がいっせいに咲いたという吉野にいけなかったのが非常に悔やまれます。(m)

▼応援しているチームが連敗中。個々は悪くないのに組織では力を発揮できないのは何故?指揮官の問題?(き)

▼表紙図版・赤ずきん物語イラスト
ウィーンのチョコレートパッケージ

(「ヴァンキュラー文化と現代社会」より)

『鴨東通信』は年2回(春・秋)刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信 No.106

2018(平成30)年5月15日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

https://www.shibunkaku.co.jp/

publishing/

表紙デザイン HON DESIGN

2018年春季特別展

さるがく おもて
猿楽と面

—大和・近江 および 白山の周辺 から—

Sarugaku Masks:
Shaping the Culture of Noh

好評開催中 - 6月3日[日]まで



重要文化財80点、総数350点にのぼる
秘蔵の古面が勢揃い!

左から、「尉」観世十郎元雅寄進 室町時代 1430年(永享2) 奈良県・天河神社蔵 / 「乙」安土桃山時代 岐阜県・(関市)春日神社蔵 / 「喝食」安土桃山時代 1616年(元和2) 岐阜県・(長瀧)白山神社蔵 ※いずれも重要文化財

イベント情報 詳細はホームページをご覧ください <http://miho.jp>

シンポジウム

「猿楽と面の進展—各地に残る面から」

コーディネーター:

高梨純次(公益財団法人 秀明文化財団参事)

パネリスト:

池田淳(吉野歴史資料館 館長)

村上尚子(石川県立美術館 学芸専門員)

南本有紀(岐阜県博物館 学芸員)

戸田浩之(福井県立美術館 主任学芸員)

●5月13日(日)13:30~15:30 ●南レクチャーホール

●定員100名 ●予約不要: 先着順、当日整理券配布

●参加無料(入館料要)

ギャラリートーク 「猿楽と面」

学芸員: 桑原康郎

●5月19日(土)13:00~14:00

6月 2日(土)14:00~15:00

●予約不要: 当日美術館棟エントランス集合

●参加無料(入館料要)

子ども向けプログラム 「子どものアトリエ」

「古代アッシリアのレリーフ」

●5月20日(日)13:30~16:00 ●小学生対象

●定員10名 ●材料費500円 ●参加する子どもと引率

者2名まで入館無料 ●予約要: 定員になり次第締切

次回予告 夏季特別展 ★夏休みスペシャル企画★

「赤と青のひ・み・つ 聖なる色のミステリー」

2018年6月30日(土)~8月26日(日)



魚形容器

東地中海地域あるいはイタリア

1世紀 ガラス

MIHO MUSEUM蔵

春のコンサート

「情熱のピアニスト 熊本マリ・リサイタル
〜スピリチュアルワインとともに〜」

●5月19日(土)15:00~16:30 ●南レクチャーホール

●参加費: 一般7,000円 /

MIHO MUSEUM友の会会員6,000円

※入館料、コンサート鑑賞、

グラスワインを含むドリンク、消費税込

●予約要: HPより申込書をダウンロードしファックス

または郵送 / 電話予約も可

マリさんからスペシャル・プレゼント

5月19日ご参加のお客様は、
翌20日(日)開催の特別追加
公演「J.S.バッハ / ゴールドベ
ルク変奏曲(全曲演奏)」に
無料ご招待!

代理の方の参加も承ります。



©Shimokoshi Haruki

主催 MIHO MUSEUM、 京都新聞

後援 滋賀県、滋賀県教育委員会、

NHK 大津放送局、**NHK** びわ湖放送、

エフエム京都

開館時間 午前10時~午後5時(入館は午後4時
まで) / 休館日 月曜日 / 入館料 一般1,100円、
高・大生800円、小・中生300円(20名以上の団体は
各200円割引) / 交通 JR琵琶湖線「石山駅」
南口より帝産バスMIHO MUSEUM行50分、お車で
新名神「信楽IC」より約15分

MIHO MUSEUM

〒529-1814 滋賀県甲賀市信楽町田代桃谷300

Tel.(0748)82-3411 Fax.(0748)82-3414

<http://miho.jp> (パソコン、携帯電話共通)

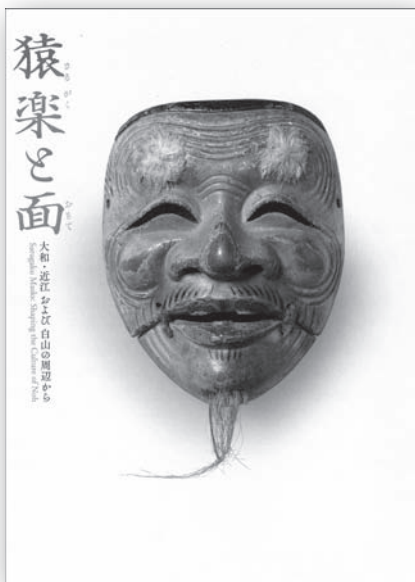
MIHOMUSEUM編／伊東史朗監修

猿楽と面——大和・近江および白山の周辺から

3月刊行

B5判・四〇二頁／本体三、二〇〇円

興福寺や春日大社などに猿楽を奉仕した大和四座の本拠地大和、世阿弥の『風姿花伝』や『申楽談義』に大和猿楽に並ぶ勢力として登場し、延暦寺や日吉大社などに猿楽を奉仕した近江、そして霊峰白山の参拝口である加賀馬場、越前馬場、美濃馬場の祭祀に使われた面（おもて）などを幅広く収集し、中世の人々が熱狂した猿楽（能楽の古称）の世界を紐解く。

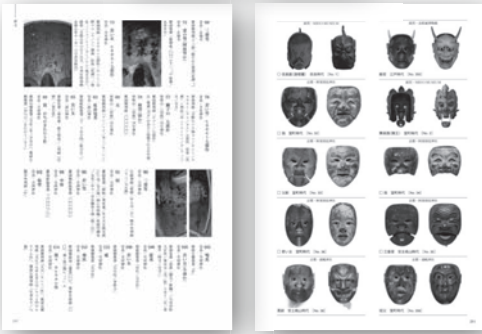


MIHOMUSEUM 2018年春季特別展
「猿楽と面——大和・近江および白山の周辺から——」の
展覧会図録。

内容
見本



平安後期から鎌倉時代の古面に始まり、南北朝から室町、安土桃山時代の大成期にわたる350点うち重要文化財80点の「面（おもて）」をカラーで掲載、さらに約500点の面の表／裏を一堂に収録する。



法隆寺編

法隆寺史 上—古代・中世—

〔執筆者〕

森郁夫
岩本次郎
東野治之
渡辺晃宏
綾村宏
久野修義
梶谷亮治

4月刊行

A5判・五二〇頁／本体六、八〇〇円

日本最初の世界文化遺産である法隆寺の
1400年におよぶ歴史を通観する初の寺史



特色

■法要、組織、美術、建築、経済などを総合することで、それらを支えた各時代の信仰の姿を浮き彫りにし、日本仏教の始源から現代までをたどることができ

■所蔵の数万点におよぶ膨大な文書・記録を整理し、一般に知られた古代の姿のみならず、中世から戦後にいたる法隆寺の姿をも新史実を盛り込んで明らかにする

■固有名詞・難字などにはふりがなを付し、引用史料は原則として読み下しとするなど、法隆寺の歴史を広く社会的な共有財産とすることをめざした
■適宜挿入図版を収め各巻に索引を付す
■巻頭にカラー口絵16ページを収録予定

■全3巻構成で、中巻（近世）・下巻（近代）の刊行時期は未定

上巻目次

- 序章 斑鳩の地理的環境と歴史的環境
- 第1章 聖徳太子と斑鳩宮
- 第2章 法隆寺の創建
- 第3章 西院伽藍と東院伽藍
- 第4章 聖徳太子信仰と子院の成立
- 第5章 南都の興隆と法隆寺
- 第6章 法隆寺の「寺中」と「寺辺」
- 第7章 法隆寺の中世的世界

吉川真司（京都大学教授）
倉本一宏（国際日本文化研究センター教授） 編

日本の時空観の形成

A5判・六〇八頁／本体 二、五〇〇円



周辺を海に囲まれ、四季がはっきりと分かれる地理的・気候的環境のなかではぐくまれた日本の伝統的な世界観はいつ、どのように形成されたのだろうか。文献史学（日本古代史・日本中世史・アジア史）、考古学、歴史地理学、国文学の研究者による個性的な書き下ろし論文24編。
古代から中世にかけての日本の時空観の形成・定着のプロセスを具体的かつ実証的に明らかにする。

大津透（東京大学教授）
池田尚隆（山梨大学教授） 編

藤原道長事典

御堂関白記からみる貴族社会―

A5判・四六二頁／本体 六、〇〇〇円



藤原道長の自筆日記『御堂関白記』に類出の言葉をとらあげ、「政務・儀礼」「邸宅・地名」「風俗・信仰」「病と医療」など11の大分類に整理、各ブロック冒頭には、専門分野の執筆者による詳細な解説を収録。『御堂関白記』を通して、最新の研究成果に基づいた新たな平安朝の貴族社会像を提示する。

坂江涉著

日本古代国家の農民規範と地域社会

古代の農民像、律令国家の社会統治原理を明らかにする

本体 九、〇〇〇円

武田佐知子著

古代日本の衣服と交通―装う王権つなぐ道―

古代大陸文化を継受しながら形成されてきた日本の衣服制を見通す

本体 六、八〇〇円

中野渡俊治著

古代太上天皇の研究

奈良〜平安時代における太上天皇の地位の歴史の変遷を解明する

本体 五、四〇〇円

臈谷寿著

平安王朝の葬送―死・入棺・埋骨―

撰関院政期の天皇・貴族の葬送儀礼を通覧し、皇権の在り方を考察

本体 三、七〇〇円

八反裕太郎（穎川美術館学芸員）著

描かれた祇園祭

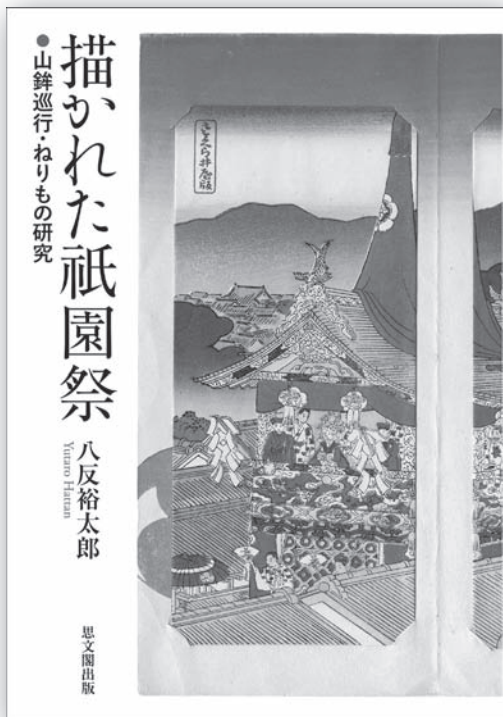
—山鉾巡行・ねりもの研究—

2月刊行

A5判・九七〇頁／本体 一五、〇〇〇円

平安期に創始された祇園祭を主題に描かれた絵画作品は数多く、洛中洛外図なども含めれば近世以前だけでも200点をくだらない。

本書は、祇園祭の山鉾巡行と、江戸中期に始まる神輿洗の日に行われた芸妓による仮装行列「ねりもの」を描いた絵画作品から、その祭儀の変遷を読み解こうとする試み。600点を超える資料図版を収載。



松本郁代・出光佐千子・彬子女王編

風俗絵画の文化学Ⅱ—虚実をうつす機知—

絵画制作に関わる人々の機知を明らかにする15篇

本体 七、〇〇〇円

松本郁代・出光佐千子・彬子女王編

風俗絵画の文化学Ⅲ—瞬時をうつすフィロソフィー—

描かれた事象の虚実を読み解き、哲学的思考への解釈を広げた13篇

本体 七、〇〇〇円

島尾新・彬子女王・亀田和子編

写しの力—創造と継承のマトリクス—

日本美術における模写の伝統をさまざまな角度から再検討する試み

本体 四、〇〇〇円

河野元昭著

琳派 響きあう美

光悦・宗達・光琳など琳派と呼ばれる芸術家らの実像に迫る27篇

本体 九、〇〇〇円

森田都紀（京都造形芸術大学准教授）著

能管の

演奏技法と伝承

2月刊行

A5判・二五二頁／本体八、〇〇〇円



室町末期から昭和期までの唱歌譜の解読と、近現代の演者の演奏技法の分析を通して、能管（笛）を中心とする能楽の演出の形成過程を歴史的に解明する試み。

これまでは制度や演能実態などの社会的側面ばかりが注目されがちであった能研究の歴史に、音楽学の専門家である著者が演奏実践の観点から新たな1ページを刻む。

中安真理（京都市立芸術大学特別研究員）著

箏篳の研究

—東アジアの寺院莊嚴と絃楽器—

A5判・二八〇頁／本体六、〇〇〇円



浄土では自然と音楽が湧きおこり、仏の功德を謳っている。

寺院においてその音楽を象徴したのが、建築物に飾られた楽器であり、長く仏教建築を莊嚴しながらも今は廃れてしまった絃楽器「箏篳」。

中国・日本の文献を博搜し、その実態を明らかにする。

三島曉子著

天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史

權威の象徴「笙」に着目し、公・武・楽家3者の関わりを論じる

本体六、六〇〇円

岡田万里子著

京舞井上流の誕生

近世く近代の流派の歴史を検証し、伝承作品群の成立背景を考証

本体九、〇〇〇円

金賢旭著

翁の生成—渡来文化と中世の神々—

中世の翁信仰の生成過程に、韓半島文化の影響を指摘する意欲作

本体五、〇〇〇円

斎藤英喜・井上隆弘編

神楽と祭文の中世—変容する信仰のかたち—

中世の信仰と思想を伝える祭文から、神楽の実態を見つめ直す

本体八、〇〇〇円

新谷和之（近畿大学特任講師）著

戦国期六角氏権力と地域社会

5月刊行

A5判・三三八頁／本体九、〇〇〇円



戦国期に南近江をおさめた六角氏。在地領主や惣村、寺社などの諸階層が織りなす近江の地域社会において、六角氏はどのようにしてその権力を維持できたのか。六角氏と地域社会をつなぐ人々の動きに着目し、城郭論や寺院論の成果も取り入れ、六角氏権力の歴史的な位置づけを問う。

村井祐樹（東京大学史料編纂所助教）著

戦国大名佐々木六角氏の基礎研究

A5判・五三〇頁／本体二、六〇〇円

これまで、戦国期畿内の政局における重要性は広く知られながら実証的な研究が不十分であった戦国大名佐々木六角氏について、可能な限り一次史料を用い、六角氏や家臣の動向、実態など基礎的事実を明らかにする。

附編として、応仁元年（1467）～元和6年（1620）の六角氏及び家臣の名が見える記録類を全て網羅した230頁に及ぶ史料集の稿本を付し、「戦国遺文 佐々木六角氏編」とあわせることで、戦国時代の佐々木六角氏関係史料はほぼ全て集成し得ることになる。

佐々木倫朗著

戦国期権力佐竹氏の研究「オンデマンド版」

常陸国佐竹氏を通して、東国の政治権力の特質を明らかにする

本体六、一〇〇円

藤井讓治編

織豊期主要人物居所集成（第2版）

政権中枢の人物総勢25名の居所情報を複眼的に確定した成果

本体六、八〇〇円

浜口誠至著

在京大名細川京兆家の政治史的研究

細川京兆家を通して、戦国期室町幕府政治の構造的特質を解明

本体六、五〇〇円

片山正彦著

豊臣政権の東国政策と徳川氏

新出史料の分析を中心に、豊臣政権の東国政策を明らかにする

本体六、〇〇〇円

長澤伸樹（仙台市博物館嘱託）著

楽市楽座令の研究

A5判・四五六頁／本体 九、〇〇〇円



織田信長に代表される楽市楽座令は、これまで日本中世における流通政策の完成型として、市場での自由取引・旧態破壊の実現や、近世城下町の成立に結びつく画期的な法令と見なされてきた。

本書では、同時代における他の流通政策や交通網・経済といった、地域ごとの政治的・社会的情勢と法令との相関関係を見ることで、楽市楽座令や楽市場が、地域ごとにいかなる意義をもち、中近世移行期の社会変動にどう位置付けられるのかを再考する。

石井伸夫（徳島県立鳥居龍蔵記念博物館学芸員）
仁木宏（大阪市立大学教授）編

守護所・戦国城下町の構造と社会——阿波国勝瑞——

A5判・三六八頁／本体 六、六〇〇円



守護所・戦国城下町の構造と社会
〔阿波国勝瑞〕
石井伸夫・仁木宏

戦国時代、100年以上にわたり阿波国の中心地であった守護町「勝瑞」。
ユニークな空間構造をもつ16世紀の地方都市・勝瑞の姿を、考古学、歴史学、地理学など多様な視角から解き明かし、中世都市史研究を大きく前進させる一書。「阿波モデル」として全国の城下町研究に提示する。

村石正行著

中世の契約社会と文書

売買・賃借などから、契約者双方の文書作成の在り方を検証

本体 七、五〇〇円

高木久史著

近世の開幕と貨幣統合——三貨制度への道程——

地域別の定点観測的な事例から、貨幣統合過程を復元する試み

本体 六、五〇〇円

呉座勇二著

日本中世の領主一揆

領主一揆の構造・結合論理を解明し、新たな国人一揆論を提示

本体 七、二〇〇円

小西瑞恵著

日本中世の民衆・都市・農村

都市とそこに生きた民衆、女性、キリスト教徒の姿を再検討

本体 八、五〇〇円

芳澤勝弘（花園大学国際禅学研究所顧問）編

江月宗玩 欠伸稿訳注

画賛篇

4月刊行

A5判・四八四頁／本体八、〇〇〇円



江月宗玩（こうげつ・そうがん 1574-1643 江戸時代前期の臨済宗の僧侶。津田宗及の子として生まれ大徳寺一五六世として大徳寺の復興に尽くした。茶道では台子伝を宗及から受け、小堀遠州などに伝えた。後水尾天皇・豊臣秀吉・近衛信尋・織田信雄・徳川家光・高松宮好仁親王・一条昭良など、多くの公家・武家の帰依を受ける。）の語録『欠伸稿』（大徳寺塔頭龍光院蔵自筆本）の画賛を翻刻。

芳澤勝弘（同右）編著

東陽英朝

少林無孔笛訳注(一)

A5判・六二〇頁／本体一三、〇〇〇円



妙心寺派四派の一つ、聖澤派の開祖・東陽英朝禪師（1498-1504）の語録『少林無孔笛』六巻を現代語訳し、詳細な注を付す。晦渋な修辭が続く、難解で知られた「文字禪」の代表である語録を、禅学の大家が500年の歳時を超えて、現代に甦らせる。全三冊。

■全巻構成■

- 一（巻之一・巻之二 入寺法語）
- 二（巻之三・巻之四 仏事）
- 三（巻之五 偈頌、巻之六 像贊・道号）

芳澤勝弘編著

雪叟紹立 雪叟詩集訓注

妙心寺派太平寺に住した禅僧雪叟紹立の詩文集を翻刻・訓読

本体一五、〇〇〇円

佐藤秀孝・館隆志共編

蘭溪和尚語録「蘭溪道隆禪師全集」

鎌倉禅宗の基礎を築いた高僧の語録を影印・翻刻、

解題を付す
本体一五、〇〇〇円

伊藤真昭・上田純二・原田正俊・秋宗康子編

相国寺蔵 西笑和尚文案

相国寺中興の祖・西笑承兌の発給した案文を活字化

本体七、〇〇〇円

五十嵐隆幸著

永観『往生講式』の研究

養福寺蔵本『往生講私記』の影印・翻刻、訓訳、研究論文を付す

本体二五、〇〇〇円

小石家文書研究会編

究理堂所蔵

京都小石家来簡集

B5判・三四六頁／本体 一四、四〇〇円



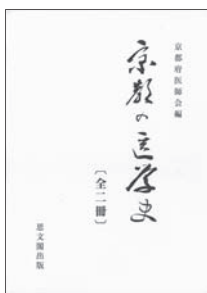
江戸後期の京都医界を主導した小石家の私塾・究理堂。
本書では、小石家究理堂が現在所蔵する貴重な史料のうち、医者・蘭学者による書簡を選んで影印・翻刻を収録。さらに史料に内在する論点を深めた論考も収め、小石家歴代の交友関係と旺盛な学事交流の実態を浮かび上がらせる。

京都府医師会編

京都の医学史

〔全2冊〕本文篇・資料篇

菊判・総二一四二頁／本体 三八、〇〇〇円



古代医学から中国医学、仏教医学、オランダ医学そして近代医学、さらに解剖、産科、鍼灸、本草、宮廷医家など、昔から優れた医家を輩出した京都の医学史を体系的に編纂。資料篇には、究理堂の資料と解説・医家門人帳・京都の医事年表・良医名鑑を収録。

中島医家資料館・中島文書研究会編著

備前岡山の在村医 中島家の歴史

江戸中期より続く在村医家所蔵の古文書・器物類の解説・分析

本体 一〇、〇〇〇円

外山幹夫著

医療福祉の祖 長与専斎

日本近代医療福祉制度の確立者である長与専斎の生涯を描く

本体 二、〇〇〇円

中山沃著

緒方惟準伝―緒方家の人々とその周辺

著者が博搜した資料とともに緒方洪庵嫡子の生涯と交遊を詳述

本体 一五、〇〇〇円

緒方洪庵記念財団 除痘館記念資料室編

緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く

緒方洪庵と除痘館事業の活動から、天然痘との闘いに迫る

本体 二、三〇〇円

桐浴邦夫（京都建築専門学校副校長）著

茶の湯空間の近代

—世界を見据えた和風建築—

2月刊行

A5判・二八〇頁／本体五、八〇〇円



高度な技術と類まれな空間構成と意匠をもつ数寄屋建築は、近代において世界から高い注目を集めるようになった。

本書は、近代数寄屋建築の数少ない専門家である著者が、茶の湯の系譜を考慮しつつ、「茶の湯空間」が近代においてどのように理解されてきたのかを読み解く試み。

小野芳朗（京都工芸繊維大学教授）

本康宏史（金沢星稜大学教授）

三宅拓也（京都工芸繊維大学講師）著

大名庭園の近代

5月刊行予定

A5判・四七〇頁／予価八、〇〇〇円



大名庭園が語られるとき、お殿様がいた近世に注目が集まるのに対し、近代はまったく忘れられてきたのではないか？しかし、明治・大正・昭和という激動の時代をくぐりぬけるあいだに、大きな変容を undergone している。

大名庭園のいまを知るために決して見落とすことができない近代の歴史を掘り起こす。

小泉和子編

茶と室内デザイン

茶道と日本住宅の室内デザインの関係性を考える一書

本体三、五〇〇円

依田徹著

近代の「美術」と茶の湯—言葉と人とモノ

美術作品と茶道具の境界線を問う、革新の一書

本体六、四〇〇円

片平幸著

日本庭園像の形成

1930年代より日本庭園の独自性が規定されていく過程を追う

本体四、〇〇〇円

岡本貴久子著

記念植樹と日本近代—林学者本多静六の思想と事績

近代国家形成の歩みに記念植樹を位置づける

本体九、〇〇〇円

尼崎博正（京都造形芸術大学教授）

麓和善（名古屋工業大学教授）

矢ヶ崎善太郎（京都工芸繊維大学准教授） 編

庭と建築の煎茶文化

—近代数奇空間をよみとく—

6月刊行予定

A5判 三三〇頁 / 予価 五、五〇〇円

煎茶の流行、茶の湯（抹茶）の復興——、近代茶道界はまさに煎茶・抹茶がせめぎ合い、融合する時代であった。

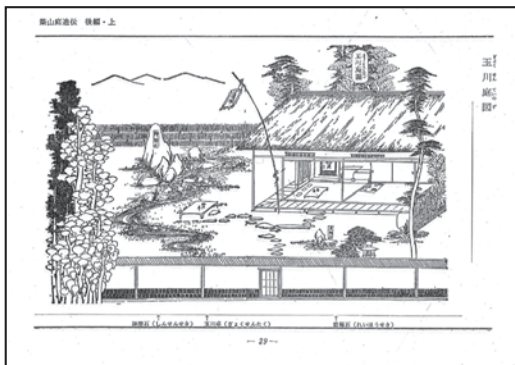
庭・建築に取り入れられた煎茶的な趣向は、茶の湯の世界と融合し、新たな近代数奇空間を形成していった。これまで茶の湯の視座からのみ語られてきた近代数奇空間を煎茶の要素に注目して新たによみとく。

ノーマン・ワデル著 / 樋口章信訳

売茶翁の生涯

煎茶の祖・高遊外売茶翁（1675—1763）の生涯をまとめた初の伝記（英語版）を書き改めた日本語訳版

本体 三、五〇〇円



谷見・矢ヶ崎善太郎校訂

茶譜「全2冊」

西尾市岩瀬文庫蔵本を底本に現存する諸本と校合し、全編活字化

本体 二〇、〇〇〇円

谷見・矢ヶ崎善太郎校訂

片桐石州茶書

『石州三百箇条』の翻刻・校合と、『大工之書』の翻刻を収録

本体 一五、五〇〇円

茨城大学社会連携センター・五浦美術文化研究所編

岡倉天心 五浦から世界へ

—茨城大学国際岡倉天心シンポジウム2016—

2月刊行

A5判・二二六頁／本体三、二〇〇円

清水恵美子（茨城大学准教授）著

岡倉天心の比較文化史的研究

—ボストンでの活動と芸術思想—

A5判・五四八頁／本体一〇、七〇〇円

東洋美術を世界に知らしめた岡倉天心が晩年を過ごしたのは、茨城の北端・五浦（いづら）。太平洋を臨む岸壁に六角堂を構えた天心は、五浦とボストンという真逆の環境を往復する中で何を思い、「茶の本」を書いたのか。五浦での生活と思索は、天心に何をもたらしたのか。2016年国際シンポジウムの記録を再構成。附録には2011年東日本大震災で流出した六角堂の復元記録、天心の主要な遺品をカラーで掲載。

明治時代に美術分野で活躍した思想家、岡倉覚三（天心、1863—1913）の主にボストンでの活動に焦点をあて、流布されている「岡倉天心」像を再検証。アメリカでの文献資料調査により発見した新出資料などを駆使し、時代の文化的状況、美術、芸術、音楽の動向など複眼的な視座から立体的解釈を試みる。

2012年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞

宗像衣子著

響きあう東西文化—マラルメの光茫、プエトロサの反影

東西の芸術文化交流の諸相、日本文化の価値を照らし出す

本体五、四〇〇円

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

日仏文学・美術の交流

—「トロンコワ・コレクション」とその周辺

本体二、八〇〇円

山岸恒雄著

セザンヌと鉄斎—同質の感動とその由縁

哲学や芸術観等から、両画家の絵の同質性を解き明かす

本体二、八〇〇円

ジャポニスム学会編

ジャポニスム入門

19世紀西洋全域にわたったジャポニスムの全体像に迫る

本体二、八〇〇円

ウエルズ恵子（立命館大学教授）編

ヴァナキュラー文化と現代社会

3月刊行

A5判・三三六頁／本体六、〇〇〇円



「ヴァナキュラー (vernacular) 文化」とは、ある集団の人々の生活に深く関連した文化と、特定の時期や時代、状況や土地で発生した文化およびそうした文化の底流となっている伝統を指す。それは、(権威をもたない文化)とも言える。

ヴァナキュラー文化研究を牽引する日米の執筆者の論考も含んだ本書は、文化についての意識を高め文化研究をより身近にするための指標となる一冊。

大塚英志（国際日本文化研究センター教授）編

動員のメディアミックス

〈創作する大衆〉の戦時下・戦後

A5判・五二〇頁／本体四、八〇〇円



現代の日本まんが・アニメーションにおけるマーケティング技法として注目されるメディアミックスを、とくに戦時下日本における「動員」の技術として捉え直すことで、メディア、プロパガンダ研究史の更新を試みる、国際日本文化研究センター共同研究成果論集。

一次資料として、日本映画史研究の第一人者・牧野守氏による三木茂（1905-1978、記録映画監督）インタビューを収録。

竹内幸絵（同志社大学教授）
難波功士（関西学院大学教授）編

広告の夜明け

—大阪・万年社コレクション研究—

1月刊行

A5判・三一六頁／本体五、二〇〇円



戦前・戦後を通して日本を代表する広告代理店であった大阪の「万年社」。同社が広告研究のために収集した資料や文献などの「万年社コレクション」は、日本の黎明期広告業界の実態をうかがえる貴重な歴史的資料群である。

本書は、主に創業時から戦前までの紙媒体資料を用いて、同時代の広告業界をさまざまな角度から活写する。

広告の太陽は、西から昇る。

2018年夏々秋 主な刊行予定

和食手帖

和食文化国民会議監修

オリエントの東(仮)

ジラルデッリ青木美由紀編著

古代・中世のムラ(仮)

大山喬平・三枝暁子編

文人画 往還する美

河野元昭著

訓読 豊後国志

太田由佳訳／松田清解説

植民地朝鮮の勸農政策(仮)

土井浩嗣著

東寺百合文書(十三)

京都府立京都学・歴史館編

絵入謡本と能狂言絵(仮)

神戸女子大学古典芸能研究センター編

『御堂関白記』の研究

倉本一宏著

近代京都の美術・工芸に関する総合的研究

並木誠士編

近代天皇制と社会

高木博志編

ネット書評サポーター募集

ご自身のブログやSNSで本書の書評コメントを書いていただけの方に書籍を献本します。

◎募集要項◎

募集書目…猿楽と面／岡倉天心 五浦から世界へ／ヴァナキ
ユライ文化と現代社会

募集内容…対象書籍は右記3点23、34、35頁掲載。募集人数は各3名、締切は5月31日です。

字 数…特に制限しませんが最低でも800字以上はお書きいただくようお願いいたします。

発表媒体…ご自身のブログ、Facebookなど、インターネット上で一般公開されているもの。

アマソンのレビューなどネット書店のレビューは対象外です。特定の範囲にしか公開されていないもの、一時的にしか公開されていないものは除きます。

Facebookの場合は、投稿の公開範囲を「公開」にしてください必要があります。

発表期限…書籍送付後3か月以内に公開してください。

申込方法…メール(yuko@shibunkaku.co.jp)・FAX／郵送で左記の項目をお知らせください。

■書評していただける書籍
■発表する媒体(媒体を確認できるURL(アドレス)を併せてお知らせください)

■申込にあたってのアピールポイント
■お名前・ご所属・書籍送付先ご住所・お電話番号・メールアドレス

審査結果の通知…各書籍募集締切後、結果をお知らせします。審査の内容についてのお問い合わせには応じられません。予めご了承ください。

思文閣グループの
逸品紹介

美^び の 縁^{よずが}



＊ 梅^{うめ} 瓶^{びん}

黒田泰蔵

鋭く均整の取れた輪郭、光沢のない白は、空間を緊張感と品格で満たします。李朝白磁を思わせる「梅瓶」の姿をしながら、清冽な現代性を感じさせる作品です。黒田泰蔵は二十五年以上にわたり、白磁のみを製作しています。ものづくりへの思いに導かれ、人間国宝・島岡達三と出会った黒田は、カナダでの作陶や島岡のもとでの学びを経て、様々な釉薬や技法に挑戦しました。しかしながら、個展や実績を重ねる一方で自分に合う技法を見つけられず、長い間苦悩の時代を過ごします。そしてある時、「轆轤成形・器・白（単色）」という制約の中に自分を閉じ込めてしまうことを決断します。無釉の白磁は焼き上がりの変化がなく、黒田の理想的な形を表現するのにびたりと合いました。薄く轆轤で引かれ、丹念に磨き上げられた作品は、極限まで美しさの本質をつきつめ、削ぎ落としていく黒田の姿勢がそのまま現れていると言えるでしょう。一つの道に徹し続けている黒田は、今や他者の追隨を許さない個性として、世界から注目を集めています。

（思文閣美術事業部・井上智草）



美術品の架け橋、 思文閣大入札会

お客様のもとで受け継がれた価値ある美術品を、求めている方へとお引き合わせします。

ご出品をご希望の方は、まず査定のお申し込みを

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355

TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533

<http://www.shibunkaku.co.jp/>

satei@shibunkaku.co.jp

我々思文閣は日本の優れた文化を
育み、伝え、広める事により一人でも多くの人々に
感動と豊かな心を与え続ける企業を目指します。

SHIBUNKAKU

思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355

TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533

<http://www.shibunkaku.co.jp/>

info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

源氏物語かるた 一組



※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355

TEL (075) 752-0005 FAX(075)525-7155

<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>

kosho@shibunkaku.co.jp

細川護光陶展

五月十九日(土)ー二十七日(日) ぎやらりい思文閣



ぎやらりい 思文閣

〒605-0089

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 386

tel: 075-761-0001 gallery@shibunkaku.co.jp